

【研究ノート】

明治 37～39 年を中心にした「小山秋作文書」目録とその概要

東亜同文書院大学記念センター資料整理 佃 隆一郎

1. はじめに

当記念センターには関係者より寄贈された小山秋作の関係文書がある。小山秋作文書はほかの資料館などにも分散的に存在しているが、当記念センター所蔵分は明治 37 年から同 39 年頃の紹介状、礼状、祝い状、依頼状、報告書など郵便による個人の書簡が多い。

主として日露戦争期の、軍事郵便をはじめとする書簡類であり、小山文書（もんじょ）と呼ぶべき史料群である。

ここでは、寄贈された資料の目録を示すが、その前にそこからうかがえる概略について述べる。

2. 「小山文書」の目録とその概略

「小山文書」に軍事郵便が多数含まれているように、小山（1862～1927 年。新潟県長岡出身）は当時陸軍軍人であったが、実は陸軍教導団（下士官養成のための組織）、士官学校時代に先輩の（東亜同文書院の基礎を築いた主要人物に属する）荒尾精・根津一と親交を結び、卒業後参謀本部員となって上海に出張し、荒尾の日清貿易研究所の経営を助けた人物であって、元来同文書院と関係は深かった。

その日露戦中には、小山は前線の奉天（現

瀋陽）の軍政署で人事業務にあたっていて、当時通訳として（前身校を含めた）同文書院関連の学生・元学生が従軍した際の斡旋役も務めていたようであり¹⁾、青木周蔵東亜同文会長からの感謝状をはじめ、同文会関係のものが数点含まれている。そのほか陸軍内部のものにしても、日露戦争時の各種様相がうかがえるものが多いと、今回書簡の解説を通じて感じた。そこで「小山文書」全点の目録を掲示して、各人の参考に処したいと思う。

※「小山文書」目録作成、紹介にあたっての方針、凡例は以下の通りとした。

- ・年代順などへの組み換えはせず、箱に入っていたままの順序にした。
- ・表題、差出人、宛先は便宜上常用漢字の新字体で統一表記したが、「満州」「満洲」は区別した。
- ・差出人、宛先は所在地も表記したが、丁目以下の番地等は省略した。
- ・年月日は本文での記載を優先し、消印のみあるものは付記した。また、西暦への統一は控えた。

以上のように、全 82 点からなる「小山文書」の内容としての中心は「現地で世話になった軍人からの礼状」であるが、関連して当時の状況報告もかなり書かれている。また



同文書院関連についても、東亜同文会幹事であった柏原文太郎に関するものなどが数点あり、今後の精査の価値があるといえよう。

3. 「小山文書」の研究史と当資料にみえる 小山秋作の行動と役割

小山秋作の、陸軍士官学校卒業後の全体の経歴を辞典類から見てみると、日清戦後の1896年には劉坤一らの総督辞意を翻意させるため清国に派遣され、帰国後も南清視察随員等、中国関係の要務を担当した。そして日露戦争では、満州軍総司令部付として戦地に赴いて、満州軍政委員に続き、奉天軍政官を務めたのであるが、同戦後の1910年に軍制改革に際しての意見対立から（病気からとの記述も）陸軍を大佐で退役して、現在のインドネシアに南洋起業株式会社を創立し、政界進出を企図して蓄財に努めたが、果たせずに没した²⁾。

現在までに確認した小山秋作について言及した書論については、著書では佐藤守男『情報戦争と参謀本部一日露戦争と辛亥革命

一』（芙蓉書房出版、2011年）があり³⁾、論稿では劉建雲「近代日本の対中国事業と中島真雄一日清貿易研究所との関係を中心に」

（『中国研究月報』第859号、2019年）がある⁴⁾。また、本記念センター研究員の石田卓生も、2019年3月のシンポジウム・ワークショップ「日清貿易研究所から東亜同文書院へ」で、「日清貿易研究所と東亜同文書院の連続性について」と題し、東亜同文書院院長時代の根津一が奉天軍政署時代の小山秋作に宛てた書簡を中心に発表している。

小山文書についての分析であるが、时期的には日露戦争が1904（明治37）年2月に勃発してしばらくした7月からになっていて、同戦争が奉天会戦の日本軍の勝利で、陸上の戦いではほぼ当面の決着を見てからの1905年4月から、同年9月のポーツマス条約調印、戦闘停止をへた、1906年2月までのものが過半数を占めている。その他、年が記されていないものや、消印からも判別が困難なものも相当含まれるが、それらも戦況はじめ各種状況についての記述や、ほかの年月日明記の書簡との関連から、おおよその類推ができるものも少なくない。また、小山は日露戦終結直後に中佐に昇進していて、階級が宛名に記されていれば、そこからも時期が判断できる。

それらからたどれる、当時の小山秋作の行動や役割としては、遅くとも開戦半年後の1904年8月までには、現地に編成された満州軍総司令部に着任し、奉天制圧後の1905年4月までに同地に設置された軍政署の委員になり、ほどなく（中佐昇進より前に）同署の長官（軍政官）を務めることになったことが裏付けできる。文書の主体も奉天軍政署時代であるが、満州軍総司令部時

代も1904年11月に、「煙台」5)に新設された軍政署の「渡辺砲兵中佐」らとの、通訳の帰国を含めた人事面でのやりとりが複数ある(日付順に、資料No.20、34、75、12、21)。これらの書簡には、伝染病の発生にふれているものもあるが、翌年2月末には収束したようである。ただ収束を知らせた書簡には、留置人の多数「処分」や中国人署員の斬首も述べられていて(資料No.31)、戦地の一面を物語っている。

そして、奉天軍政署でいっそう小山は「頼りになる」人物としての役割を果たしていたようであるが、戦局自体は小康状態になったことからであろう、書簡には日露戦後の「満州」の位置づけに関する私見を記したのが目立ってきている(資料No.62、22。30は年月不明なもの同様)。終戦後も奉天軍政署はしばらく存置されたが、帰国する関係者が増えていくにつれ礼状が多くなっていく一方、戦後の現地統治機関として、戦中の関東総督府に代わって関東都督府が新設されることになり(1906年8月設置。小山もそこに半年所属)、小山のもとには帰国よりもそこでの勤務を望む書簡も舞い込んだ(資料No.51)。人事面での希望は小山文書全体の傾向の一つであり、小山の人脈の広さと、ある種の人格を物語っていよう。

4. 東亜同文会と小山秋作とのつながり

陸軍教導団、士官学校以来、荒尾精・根津一と旧知の仲であった小山秋作と、東亜同文書院・同文会関連とのつながりを示す、「小山文書」での書簡としては、青木周蔵東亜同文会長より小山への感謝状(資料No.4)や、同文会設立時からの会員であった、柏原

文太郎同文会幹事宛ての、小山以外の人物の書簡(日付順に、資料No.44、45、46、50)については前述した。柏原宛てのものが小山文書に含まれているのは意外な感もあるが、青木会長から小山への感謝状は、現地で柏原に小山が便宜をはかったことに対するものであり、二人の関係の深さを物語っているものであろう。

その他としては、東亜同文会の前身のひとつ「興亜会」(1880年設立)が開設した「支那語学校」の卒業生である恒屋盛服6)が、同文会所属の人物として、小山に宛てた書簡が複数ある。まず目録の最初にあたる資料No.1は、通訳として従軍中の「同文書院卒業生の和田俊雄」(同窓会名簿には記載なし)7)を本人希望の軍政署付にするための紹介状であり、日露終戦翌年の、年賀状を兼ねた礼状(資料No.18)では、「柳原氏の任務」への援助のお礼とともに、「留学生問題」がほとんど落ち着いたことや、「屋城汽船会社」の運行も経営も順調なことは「ご庇護によるもの」であることが記されているのであり、探究の余地のある内容である。

5. おわりに

現段階で「小山文書」から確認しえたことは、およそ以上である。小山秋作について辞典類で取り上げているものは限定的であるようであるが、インターネットでの検索では関連資料が複数の機関で所蔵されていることがうかがえるのであり8)、それらも確認して検討することで、さらなる考究につながる可能性がある。

- 1) 中村義・藤井昇三・久保田文次ほか計6名編『近代日中関係史人名辞典』(2010年、東京堂出版) 206頁での中野弘喜執筆項より。
- 2) 同前。
- 3) 同書では第Ⅲ部「参謀本部の対清情報活動」で、小山秋作についてかなり触れられている。この「第Ⅲ部」には外郭協力組織として「日清貿易研究所」も設立されていて、東亜同文書院大学史自体にとっても参考になる。
- 4) 同論では後半の、やはり荒尾精・根津一と親交のあった中島真雄が、日清貿易研究所卒業生の実習機構であった日清商品陳列所の管理と運営に参入した時期の記述に、同陳列所の幹事だった小山の業務を引き継いでいったことが言及されている。なお、引き継ぎ後の1893年末に、小山がいったん陸軍を依願退職したとも記されているが、前掲『近代日中関係史人名辞典』ではその記述はない。
- 5) 現在の遼寧省瀋陽市南方の灯塔市。
- 6) 『東亜同文書院大学史』(滬友会、1982年)では、興亜会設立の中心人物を宮島誠一郎とした上で、「支那語学校からは宮島の子息大八をはじめ(...)恒屋盛服など、のちに大陸の外交界・財界で活躍した有為の人材が輩出している」と述べている(42頁)。本目録での資料No.9に、通訳を拝命した人物に小山を紹介した者として「宮嶋先生」という名が出ている。
- 7) 南京同文書院や上の「支那語学校」など、前身校といえる所の出身かもしれないが、資料No.29の礼状を小山に出した陸軍通訳・和地永辰は、東亜同文書院の1期生である。
- 8) 中央大学図書館には『小山秋作氏旧蔵奉天軍政署関係史料』が収蔵されている。防衛省防衛研究所の「奉天軍政官」関連史料としてのワードでは、計49点の「小山秋作作成文書」が出てくる(「国立公文書館 アジア歴史資料センター」ホームページより)。

6. 「小山秋作文書」目録

No	形態	表題 (便直上新字体で表記。以下同)	年月日	差出人	宛先	軍事郵便	内容・備考・記事
1	書簡 (封筒付)	(紹介状)	明治38? .5.1	東亜同文会 恒盛盛服	中佐 小山秋作		同文書院卒和田俊雄氏の、通訳への紹介状 (和田氏自らが持参したもよう)
2	書簡 (封筒付)	(約束状)	.5.15	大川少佐	軍政署 小山少佐		転出に際しての履歴書送付を約束。封筒の差出人は「大川列?官」と記
3	書簡 (封筒付)	(年賀状)	明治39.1.1	良? 函軍政署 秋山定治郎	奉天軍政署 小山秋作	○	消印 (同月10日付) は「鴨緑江軍 第一野戦局」
4	書簡 (封筒付)	(感謝状)	明治38? .12.20	子爵 青木東亜同文会長	小山中佐		東亜同文会幹事・柏原文太郎の潜在中への便宜に対するもの。 青木 (周蔵) は1904年から06年1月まで会長
5	書簡 (封筒付)	(紹介状)	(用箋に「明 治」と印刷)	在撫順附近竜鳳岡 騎兵第十一聯隊 本部 矢田部甫一	奉天軍政署 小山秋作		部隊内の「良甫」が奉天の将軍に面会に行くことへの便宜願ひ。 封筒オモテに「良先生持参」と記
6	書簡 (封筒付)	(近況報告と礼状)	明治38.3.12	東京市麻布区新竜土町五番地 沼十太郎	大 清国軍総司令部 陸軍歩兵少佐 小山秋作	○	日露戦争で負傷して帰国したことと報告と、その配慮をして下さったことへの感謝。 文中に「今奉天占領ノ捷 (勝) 報」とあり
7	書簡 (封筒付)	(近況報告と祝い状)	明治38? .4.7	東京市備前院渋谷分院評校院? 鹿谷峯大	清国奉天軍政署 小山軍政署長官	○	戦地から帰国し手術を受けたことと報告や、小山氏の奉天責任への敬意
8	書簡 (封筒付)	(封筒送付の申告)	.7.26	大川少佐	小山少佐		使用封筒には「大川列?官」「小山軍政署」と記
9	書簡 (はがき)	(拜命挨拶状)	.7.6	門司市 倉沢保	満洲軍総司令部		死後は転送 (貼付。同月9日印) のほか、「東京」のみ判読可。倉沢氏の拜命は陸軍通訳で、「宮嶋先生より貴下に御紹介を願ひ、種々ご配慮を仰ぎし」とあり
10	封筒のみ		.4.2	撫順 中島古中	東京市外下渋谷八二二 代官山 小山秋作		書留。右端に穴あけ
11	書簡 (封筒付)	① (近況報告と連絡)	明治38.7.3	出征後備歩兵第五十五聯隊 第二大 隊 陸軍歩兵大尉 渡辺桃溪	在奉天日本軍政署 陸軍歩兵大佐 小山秋作	○	消印2つ (同月4、5日付) のほか、同大隊の印も。 ②の履歴書の者が通訳として彼なりに熱心に勤めていたことを後半に記
	文書	②履歴書	明治38.6.21	諸石照一		○	当人の解任、帰国にともない同封か
12	書簡 (封筒付)	(依頼状)	明治37? .11.18?	煙台軍政署 渡辺砲兵中佐	満洲軍総司令部 歩兵少佐 小山秋作		軍政署開設にともなう人事起案の内示を依頼することにも、実際に軍艦が進んでいることを確認したと思われる。記名は本文には「渡辺生」「小山大人 (うし)」
13	書簡	(近況報告)	.10.14	江希波	小山軍政署		瀋陽で会ってから本拠地に戻ったのち、各方面との連絡がうまくとれていないことをわび る一方で、異状はないとしている。「江希波 辺見俊彦」の (後世の) メモあり
14	書簡 (封筒付)	(意見状)	30日	本願寺 第二軍醫部内 布教使方寓 中野二郎	総司令部隣 小山少佐		満洲の開発・経営に関する私見を列記。各氏の名をあげ、連絡や協力を望んでいる
15	書簡	(載況報告)	.12.28	花田少佐	小山少佐		専用連絡用箋 (No.12と同一) に記入しているが鉛筆書き (発簡地「台隆輪船」?)。 日露戦争後の小振り合いの報告か
16	書簡 (封書)	(祝い状)	明治39.2.8	大日本相州小田原御用邸 加 賀美光賢	満洲奉天府小西関茂林館内 奉天 医院 中村四方吉		旅順から転任して医院を開業したことへのお祝い。 加賀美氏と小山氏は親類で、小山氏の近況にも言及
17	封筒のみ		大正? 6.2.7	東京市外下渋谷 字代官山 山光泉	神奈川県箱根声の湯 松坂や 小山秋作		貼付切手は15銭分
18	書簡 (封筒付)	(年賀と礼状)	明治39.1.9消印	東京赤坂区溜池町貳番地 亜同文会 恒盛盛服	東 満洲奉天府軍政署 中佐 小山秋作		「柳?原氏の任務」への援助に対するお礼とともに、「留学生問題」が落着いたことや、「屋城汽船会社」が順調に運航していることなどを報告

19	封筒のみ	明治37.9.2	青泥窪 軍政委員 川崎	満洲軍総司令部 歩兵少佐 小山秋作	○	消印に「第三軍 第一野戦郵便局」と記
20	書簡 (封筒付)	明治37? .11.12	煙台軍政署 陸軍通訳 尾崎清	満洲軍総司令部 小山少佐	○	自らの辞職に対する考慮に礼を述べるとともに、 現地にない関連規程の確認をお願いしている
21	書簡 (封筒付)	明治37.11.21	煙台軍政署 渡辺砲兵中佐	満洲軍総司令部 歩兵少佐 小山秋作	○	②を同封、転送することを述べたうえで、 炭鉱調査や伝染病発生による通訳の補充を訴えている
	文書	明治37.11.	陸軍通訳 尾崎清		○	②を同封、転送することを述べたうえで、 炭鉱調査や伝染病発生による通訳の補充を訴えている
22	書簡 (封筒付)	明治38.10.15	伊豆国熱海富士屋別荘 青木喬?	奉天軍政事務署 歩兵中佐 小山秋作	○	当人の解任、帰国にともない同封か 野地でマラリアにかかって内地に帰還したことを伝え、文の後半では日露戦争後の満洲への 私見を述べている
23	書簡 (封筒付)	.3.19	坂西利八郎	小山中佐		「西川中佐」への「別電」を発送するので、一覽の上で意見を求めたいとしている
24	書簡 (封筒付)	.2.13	与倉	小山		封筒オモテに「拜託 安井先生」とも記、同教授の北京からの帰国を知り、 小山氏に面会をお願いしている
25	書簡 (封筒付)	明治39.3.25 (消印は前日)	通江口、昌図軍政支署気付 成田安輝	奉天軍政署 小山中佐	○	入れてあったポリ袋に「成田安輝 (脚蹟) 小山秋作宛」と貼紙。②を総督と交渉局長に伝 送することをお願いするとともに、「福島閣下ノ意図」などに言及
	写真				○	計3点。同一ネガと思われる
26	書簡 (封筒付)	明治37.8.25	大本営陸軍副官 堀内文次郎	満洲軍総司令部 陸軍歩兵 少佐 小山秋作	○	封筒オモテに「皆川秀孝ニ関スル来信」と貼紙。皆川氏は後備騎兵軍曹で、日露戦争への 従軍希望をうけて、堀内氏が紹介
27	書簡 (封筒付)	.9.14	營口旋泊 陸軍救助船、高砂丸 永 原満軍少佐	奉天軍政署 (ママ) 長官 小山陸軍少佐	○	停泊中の便宜へのお礼と、大連に出港することを伝えている
28	書簡 (封筒付)	明治39.2.27	大連治速? 町 丁 茨方 石 田口亥	奉天軍政署 小山中佐	○	大連に着いたことを連絡したうえで、同封の②をお願いしている。
	書簡 (封筒付)	明治39.2.26	松本経理部長	奉天軍政長官 小山中佐	○	封筒オモテに「第七師団経理部」とも印
29	書簡 (封筒付)	明治38.5.12	出征遼東守備軍 後備歩兵第四旅団 司令部 陸軍通訳 和田永辰	奉天軍政長官 小山中佐	○	奉天への転任に際してのもの
30	書簡 (封筒付)	明治37.9.12	第三軍騎兵第一聯隊本部 勝木恒喜	奉天軍政署 長官 小山秋作	○	現地での便宜へのお礼とともに、将来の再会を祈念している。
31	書簡 (封筒付)	明治38.2.27	煙台軍政署 白尾義夫	満洲軍総司令部 陸軍少佐 小山秋作	○	病気で後送されたことを伝えたあと、「運動」への協力を願っている。 封筒オモテに鉛筆で日付?を書込み
32	書簡 (封筒付)	(日露戦後) 3.8	西川中佐	遼陽満洲軍総司令部 軍政委員 小山少佐	○	佐染病の取戻により隔離所を閉鎖にしたとすると、「留置人の多数処分」や中国人警員 の斬首も。白尾氏は軍政署長官の留守役をしていたもよう
33	書簡 (封筒付)	明治38.9.30	新兵堡 加藤信夫	中佐 小山秋作		封筒オモテに「荒木君持参」と記。「遼東新報」の中国人への売込みのため、 まず荒木氏との打合せをお願いしている
34	書簡 (封筒付)	明治37? .11.17	第十師団司令部 黒江左詩七	奉天軍政署 軍政長官 小山中佐	○	花田中佐の奉天出張に随行している松田大尉に、 別封のものを渡して下さるようお願いしている
35	書簡 (封筒付)	.3.26	老軍屯 西端口	遼陽満洲軍総司令部 小山少佐		受領を知らせたあと、ある人物への処罰について述べている
36	書簡 (封筒付)	明治38.4.27	東京渋谷分院将校病室 部精二	奉天軍政署 小山軍政長官 奉天軍総司令部 歩兵少佐 小山秋作	○	公務でしばらく旅順に滞在することになり、お礼が言えなくなることへの断り状。 「井深 中嶋 林 坂西」各氏の名も記 戦病のため本土に後送されたが、手術後は回復が順調なことを報告。 末尾に「福島閣下」と記

37	書簡 (封筒付)	① (依頼状)	. 9 ? . 18	田中中佐	小山中佐	封筒の差出人は「田中中佐」、宛先は「奉天軍政署 小山中佐」
	書簡 (封筒付)	② (紹介状)	. 9 ? . 17	西川中佐	田中中佐	松浦軍曹 ②の中に名刺としてか記名紙片在中)の奉天見学をお願いした②を、西川中佐に見せるよう①でお願いしている
38	書簡 (封筒付)	戦地勤務希望ノ件	明治37.7.15	青森市 歩兵第五聯隊補充大隊 本多善次郎	東京市麹町 陸軍参謀本部々員 陸軍歩兵少佐 小山秋作	戦争中に内地勤務にあることを遺憾とし、表題 (封筒オモテに貼付) のことを懇願
39	書簡 (封筒付)	(挨拶状)	明治38.6.13	第一軍 佐木兵站司令部 通訳 森塚敬一	奉天軍政官	第二師団第一監獄隊付に配属されたことを伝えたと、「井深氏へもよろしく」と記
40	書簡 (封筒付)	(戦況報告)	明治38.4.21	第一軍 兵站監部参謀部 塚敬一	満州軍総司令部 奉天軍政署員 小山秋作	遼陽から大瓢屯への前進の模様を、短歌をまじえて報告。 末尾では、食糧の補給が不便になっていることも伝えている
41	書簡 (封筒付)	(礼状)	明治38.12.27	東京浅草区千束町 田美盛	奉天軍政署 小山秋作	中国滞在中のお礼と、大連から無事帰国したことを報告
42	書簡 (封筒付)	(礼状)	明治38.6.13	金州守備隊 前田小太郎	奉天軍政署 軍政官 小山中佐	奉天在勤中 (特に送別会)のお礼を、多忙のため遅れたことへのお詫びとともに、「将校一同に代り」述べている
43	書簡 (封筒付)	(礼状)	明治38.10.28	南三十金堡 後備歩兵第五十二聯隊 第二大隊長 陸軍歩兵少佐 近藤正弘	奉天軍政官 小山中佐	「貴地勤務中」の公私にわたるお礼と、遠からず凱旋帰国してからも「貴意を得たい」ことを伝えている
44	書簡 (封筒付)	(断り状)	. 4. 29	日本橋区本銀町 高木益太郎	柏原文太郎	「本日の政見演説」への招待は辞退するが、代理として商工時報主幹「南」氏を出席させるとしている。柏原氏は東亜同文会幹事 (→№4)
45	書簡 (封筒付)	(紹介状)	. 3. 19	東京市小石川区小日向台町 崎達之輔	高田老松町 柏原文太郎	電話で依頼された成田高等女学校地歴教員候補として、古賀映氏を紹介。 この書簡を古賀氏に持参させよう
46	書簡 (封筒付)	(依頼状)	. 10. 2	東京市牛込区北町 五百木良三	牛込西五軒町 柏原文太郎	「仙田氏の添書の件」で、同氏が出発する前の本日夕方中に自分まで「届けて」ほしいことを依頼。封筒オモテに「大至急用件」と記
47	書簡	(礼状と近況報告)	. 11. 19	欲津辰一郎	小山	無事帰着したことで、滞留中の礼を記したあと、当地の港 (冬季凍結) に多数の日本人が到着しつつあることを述べている。メモ紙片付き (別の書簡が)
48	書簡 (封筒付)	(報告書)	. 10. 5	松浦 (寅威)	総司令部 小山少佐	「吳」氏の取り調べがすんだので、前日午後後に第四軍司令部へ出頭したと報告。 「重太郎」氏と相談したいとも記。メモ紙片付き
49	書簡 (封筒付)	(状況報告)	明治38.6.19	安東軍政署 通訳官 青木礼口	奉天軍政署 小山秋作	軍政委員の「大原」氏が兵站司令部に非難されているとの、一連のことを詳述。 冒頭で日本海海戦の大勝にも言及
50	書簡 (封筒付)	(挨拶状)	大正5 ? 4. 29	上海 李偉安	日本東京市小石川区高田老松町 柏原文太郎	中国語文。帰国のあいさつか。消印はオモテが「…4.16」ウラが「5.5.5」
51	書簡 (封筒付)	(願い状)	明治38.10.22	蘇家屯 第十二師団兵站司令部 陸軍憲兵少佐 蔵田信一	奉天軍政署 陸軍歩兵中佐 小山秋作	講和条約で常設されることになった関東都督府について、凱旋帰国よりもそこに勤務したい意を伝え、相談をお願いしている
52	書簡 (綴。 封筒付)	(報告書)	1918.7.8消印	星架坡 (シンガポール) 明則路 福屋方 平井仲三	東京 下渋谷 代官 山 小山秋作 (左とも英文併記)	小山氏の軍退役後の事業 (糖輸) 関連。付表「アワイ島維持地救済朝間美測量表」
53	封筒のみ		明治37.7.19消印	野戦第十師団附属軍政署 軍歩兵少佐 安東斌	東京 大本營 満州軍政委員事務取扱所	「公用至急」と朱印。さらに左上には「□ (誤?) 送」と青字で記
54	書簡 (封筒付)	(礼状と近況報告)	明治39 ? 2. 15	門野戦兵器庫 陸軍砲兵中佐 地原照	在奉天軍政署 陸軍歩兵少佐 小山秋作	急に帰国を命じられたため、充分なあいさつができなかったことをお詫びするとともに、「凱旋部隊に対する歓迎」への所感も述べている
55	書簡 (封筒付)	(挨拶と近況報告)	明治37 ? . 8. 4	營口軍政署 □□ (八名。三字力) 藤野貞順 岩切明知	満州軍総司令部 小山少佐	着任のあいさつとともに、日常の業務を各人との面会も含めて報告

56	書簡 (封筒付)	(挨拶状)	明治38.8.24	出征第十六師団歩兵第六十三聯隊 第二中隊 歩兵少尉 松川重四郎	奉天軍政署ニテ (ママ) 小山秋作	○	新設部隊に転任して、目的地に到着したことを報告
57	書簡 (封筒付)	(状況報告)	明治38.7.20	鳳凰城第一軍軍政署 通訳官 大貫次郎	満州軍総指揮官司令部 陸軍歩兵 少佐 小山秋作	○	当地の軍政署の業務が一段落したことを述べる一方で、食糧の運搬が依然滞っていること も伝えている。
58	はがき	(年賀状)	.1.13	大連市西公園町 辺見勇彦	東京市外下落合 小山秋作	○	年賀状を前の住所に送ったため戻ってきてしまい、改めて出して運けなくなったとお詫び
59	書簡 (封筒付)	(近況報告)	明治38.7.6	遼陽軍政署 伊藤松雄	奉天軍政署 陸軍歩兵少佐 小山秋作	○	病気のためひとまず帰国することを報告。追伸でほかの人の病氣傳国も
60	書簡 (封筒付)	(願い状)	明治38.5.17	金州軍政署 土屋鼎	奉天軍政署 小山軍政官	○	「新官制の発令」で、まずは旧ロシア租借地を民政化するために軍政署を移転することに なったが、その際の異動では小山氏のもとに戻りたいと、取り計らいを懇願
61	書簡 (封筒付)	① (状況報告)	明治37? .11.15	横浜正金銀行 牛莊支店 崎龜之助	遼陽 満州総司令部副官 陸軍少佐 小山秋作	○	金州で神尾少将と面会できたが、西大将とはできなかつたので、 ひとまず②をお返しすること
	書簡 (封筒付)	② (紹介状)	明治37? .10.30	小山少佐	西大将	○	全体としては都合よく運んでいるとも、紹介されている三崎氏は貴族院議員
62	書簡 (封筒付)	(意見書)	明治38.4.12	東京 善隣書院 小越平陸	在満洲 奉天府 軍政委員 陸軍少佐 小山秋作		奉天会戦での勝利を喜びつつ、今後の戦局と戦後経営への意見を当局に述言するとし、小 山氏にも小包を送って対談を願っている
63	書簡 (封筒付)	(年賀状)	明治38.1	相州 鎌倉 児玉淳一郎	満州軍総司令部 小山少佐		「皇軍の大勝」を祝福。日付は「一月吉祥日」と記
64	書簡 (封筒付)	(追加状)	.2.7	歿? 瀋川崎? 馬之進	奉天軍政署 小山秋作	○	満州人・福伸を「候補」として推薦した、先の書簡に別紙 (同人の履歴を記した紙片) を 入れ忘れたとして、追加で送ったもの
65	書簡 (封筒付)	(連絡状)	明治38? .4? .24	小越平陸	小山秋作		ただ今着いたので、少し面会したいとのみ記。№62の続きか
66	書簡	(礼状と近況報告)	.1.28	海津津?	小山中佐		お礼は現地でのことと頼村授与に対して。帰国、帰朝を報告
67	書簡 (封筒付)	(願い状)	明治38.7.4	第一軍司令部 大尉 平山治久	奉天軍政署 歩兵少佐 小山秋作	○	奉天で世話になったお礼のあと、本日無事任地に到着したことを伝えるとともに、 将来のこの相談をお願いしている
68	綴	遼陽雜聞	.1.9	石川通訳	小山少佐		報告書。4項目述べているが、2つ目の「例年がない温暖な気候で住民は『天助日本』と 言っている」に、鉛筆で○印がついている (後世の添記か)
69	書簡 (封筒付)	(年賀状)	明治39.1.元旦 (消印は7日)	大日本東京市本郷区弥生町 児玉孝頭 (のりあきとルビ)	満州奉天軍政署内 陸軍歩兵 中佐 小山秋作		前年6月に司法省に入り、検事代理を務めていることを合わせて報告 (児玉氏のルビも後世の添記か)
70	書簡 (封筒付)	(礼状と近況報告)	明治39.2.3	瓦房店守備隊長 歩兵少佐 久津秀夫	奉天軍政署 歩兵中佐 小山秋作	○	現在いる守備隊と兵站の、業務引継ぎを受けつつあると報告
71	書簡 (封筒付)	(願い状)	明治37.10.19	管口 東肥? 洋行内 松倉善宗	満州軍総司令部内 小山少佐	○	田綱 (安之助か) 氏の遼寧訪問の際依頼した内地通行のことや、 報告資料作成のための視察の必要を述べている
72	書簡 (封筒付)	(返書)	明治38? .10.24	於小気? 山 独立重砲兵旅団 司令部 佐佐木義統?	奉天軍政署 軍政官 小山中佐	○	田綱や小銃の注文・購入に対する回答。佐佐木氏は工廠との取次ぎ役か
73	書簡 (封筒付)	(礼状)	明治38.7.19	後備歩兵第六十聯隊 第四中隊 東堂豊吉	奉天軍政署 陸軍歩兵少佐 小山秋作	○	同月初旬「御尽力ヲ以テ」上等兵に昇進したことへのお礼 (第六十連隊はその後豊橋に連駐)
74	書簡 (封筒付)	(近況報告)	明治38.7.6	遼陽兵站病院 西島良爾	奉天軍政署 陸軍歩兵少佐 小山秋作	○	病気で入院し、翌日大連に後送されることを報告。 入院後牧野少佐より第四軍付になる打診を受けるも、保留したとも
75	書簡 (封筒付)	(意見書)	明治37? .11.17	煙台軍政署 渡辺砲兵中佐	満州軍総司令部 歩兵少佐 小山秋作	○	人事に対して疑問を示し、善処を要望。渡辺中佐の下の名は「敏太郎」

76	書簡 (封筒付)	(礼状と帰国報告)	明治38.10.5	東京 大蔵省 児玉秀隆	奉天軍政署 小山中佐	潜在中の「厚志」へのお礼と、無事東京に帰ってきたことの報告。 冒頭で野連への敬意を示している
77	書簡 (封筒付)	①(紹介状)	明治38.11.10	出征第一師団司令部 歩兵少佐 隈部親信	奉天軍政署 陸軍歩兵少佐 小山秋作	②の人物(日清貿易研究所出身)の勤務の優秀さを述べて、部隊帰国後も留まりたいとの 本人の希望を伝え、斡旋を依頼している
	文書(綴)	②履歴書	明治38.11.8	第一師団司令部附 陸軍通訳 別府真吉		
78	書簡 (封筒付)	(願い状)	明治37?.9.6	本部? □□ 西川虎二郎?	出征満州軍総司令部 陸軍歩兵少佐 小山秋作	軍政署への異動をお願いしている。封筒に「22/9」と青色で記(後世の追加か)
79	書簡 (封筒付)	(報告書)	明治38.5.5	第二軍兵站参謀長 有田忍	奉天軍政署 軍政官 小山秋作	前夜に発生した突砲事件について調査したところ、 歩哨が野犬に向けて撃ったことが判明したことを報告
	書簡(綴) (封筒付)	(状況報告と漢詩)	明治37?.10.23	京都市吉田町字二本松 藤常三郎	満州軍総司令部参謀部付 小山	京都での「善隣学院」創設が具体化したことから、日本の清国人留学生への所感を述べる とともに、「従軍」の話は詳さないとも記している
81	はがき	(年賀状)	明治39.1.3消印	東京市麴町区品田町 花田仲之助	清国満洲奉天 大日本軍政署 小山秋作、林介弥	小山氏の身上や家事について、林氏に配慮を願っている
82	はがき	(年賀状)	大正?.12.1.10	大連市西公園町 辺見勇彦	東京 下渋谷 小山秋作	返信。年末軍司令官一行に随伴していたので、賀状が遅れたとのこと